

【コメント】

姜希雄報告およびE.Shultz報告に対するコメント

平木 實
天理大学

姜希雄報告に対するコメント

この報告は新羅時代の王権と官僚政治について考察したもので、これまでの研究の成果を十分に活用して考察した労作であると考ええる。

報告者は、この国際研究集会のテーマと関連して、高句麗、新羅、百済の古代三国の中で新羅の血統と地縁を基盤とする骨品制と呼ぶ特別な貴族政治体制があった点に注目して新羅の政治体制について論及したものと理解する。その貴族政治体制の原型は、戦士の性向の貴族政治を基本としていたという学説に賛同する立場に立って考察した論を展開している。

新羅の頭品階層の屋舎に付設することのできる馬廐の規模を定めた規定が『三国史記』にあり、また新羅の主力軍団が王京人によって構成されていたことから、建国初期から戦士团的性格をもちつつ強大になってきた国家であった形跡が濃厚であったとする。しかし、早い段階で仏教が伝播し、また中国で発達した律令制を導入しているところから、戦士团的性格が建国後どのように存続したかについては疑問が残る。例えば、新羅時代の文化的特色の一例として、花郎道という青年集団が取り上げられることが多いが、仏教による護国的加護を期待する信仰や儒教、道教的思想を学びつつ、山野を巡り、武芸を磨いたという青年たちからは、あまり初期のような戦士团的性格はうかがえないように思う。つまり、この半島における国家の交代のさいには、必ず武力によってそれまでの国家が打倒される歴史を繰り返してはいるが、ひとたび新しい王朝国家が成立すると必ず文治政策による文人国家になっていくことに注目したい。また対外的には、ほかのアジア諸国もそうであったように、中国との間に朝貢関係を結び、その枠の中で自国の安全保障を取り付けるとともに、国内的にも王権の安定を期した点に注目する必要があると考ええる。

いっぽうで、初期に朴、昔、金の3氏族が交代で王位についていたものが、4世紀ごろから、金氏によって世襲される傾向を見せ始め、王族は、聖骨と真骨に区別されて真骨のすぐ下には、六頭品、五頭品、四頭品というように、王族でない貴族支配階層が官僚体系のなかに存在していた。聖骨から出していた国王が、次に真骨からも出るようになり、さらに後代には王位継承争いが頻発する状況にたちいたるが、それは王権を特権として利用するようになっていたことを意味する。王族たちは、特に学問をしたわけでもなく、反対に頭品階層のなかからは、学問に秀でた人材も輩出するようになり、王族の享有する王権によって制限を加えられるところから不満を抱く者も存在し、国家の発展に一定の足かせをはめる結果になった時代であったと思

われる。しかし、ほかの一方で、国民の幸福は、仏教を信仰することによって、また風水地理説によって土地の吉凶を占い、吉相の地に暮らすことによって幸福がもたらされるという説に依存する風潮も存在したことを特徴と考えることができよう。

E.Shultz報告に対するコメント

統一新羅に代わって935年に高麗王朝国家が樹立されたが、この王朝国家も文治主義による政治支配体制をとり、初期には、極端な王族内の族内婚を行っていたが、985年に科挙制度が実施されるようになったところから、族党を基盤とする官僚貴族が台頭し始めると王族以外の貴族とも婚姻関係を結ぶようになった。その貴族たちは、王族の外戚として権勢を誇り、王権に制限を加えるほどの勢力に発展したこともあり、ほかの貴族たちと軋轢も生じた。いっぽうで、高麗初期以来文班と武班という両班体制が確立されて、国王と両班貴族による政治行政体制を継続させるが、初期から存在した文尊武卑の風潮は武官たちに不満を抱かせ、1170年に鄭仲夫をはじめとする武官たちがクーデターをおこして政権を奪い取るという事件が発生した。本報告は、文治政治を伝統にするこの国において武官が政権を掌握するという特別な事象に注目して考察を加えた論考である。

政権を掌握した武臣たちは、相互に権力抗争を繰り返しながらも政権を独占し、特に崔氏政権の場合には、私兵を保有して武力を持ち、さらに教定都監を設けてその長の教定別監に就任して権力を独占するようになる。この教定別監という官職にたいする任命状は、国王から発給されることになっていたが、それは、形式的なものに過ぎず、武人政権が打倒されるまで続き、国王を頂点とする高麗の従来の統治機構は完全に虚構化してしまう。しかし武臣たちは、王朝制を廃止することはせず、王朝国家を存続させつつすべての官職や政治行政の実権を掌握していたことにこの武臣政権の特徴があると考えられる。